

大熊由紀子教授 5月15日

出会う・つなぐ・変える～発信力を磨く・想像力を磨く

第5回 小島 操先生

～ケアマネの仕事と、環境整備による自立支援～
保健医療学専攻 医療福祉ジャーナリズム分野
12S3048 藤原瑠美(八島 Hattori)

ケアマネジャーが抱える困難

小島先生は授業の冒頭、日本のケアマネが置かれている立場を占めず数字を提示なさった。

17%。これは、昨年10月に行った東京都の介護支援専門員（ケアマネ）試験の合格率で平成24年のもの。

平成10年の44%と比べると、合格率ががたんと落ちている。それはなぜか。全国的な受験者の数は、ケアマネ制度ができた初年度は20万人、次年度は16万人の人が受験していたのに、15回目になると、その数は2万人に減っている。

職種別受験率を見ても、看護師の比率が落ちている。これは、ケアマネは介護保険制度の縛りが多く、大変な労力を使う割に収入が少ないという悪評の所為であるようだ。ケアプランを立てて得られる月収は、東京都の場合、1件につき11,316円（要介護2以下）と14,705円（要介護3,4）である。しかも、ケアマネひとり当たり40件までしか引き受けられない。

看護師をしていた方が収入がいいという結論が出てしまうのだ。小島先生のようにケアマネで独立した事務所で開業するのはさらに難しい。なにより、最近はケアマネ不要論まで出ている。

スウェーデンのケアマネ

ケアマネと聞くと、スウェーデンの地方都市、エスロブ市の定点観測を続けているなかで出会ったイボンヌさんを思い出す。あちらのケアマネはニーズ査定主事（Bistandsbedömare）と呼ばれていて、市の職員なのだが、かなりの権限が委譲されていた。

何より介護認定審査会がない。プランを彼女が即決できるのだ。利用者の家を訪ねて面談して、事務所に戻ると、その場でケアプランを訪問介護の事務所のマネージャーに送り、すぐにケアが実行される。

日本も、もっと権限が移譲されればいいのに。もっと経済的にも保障されればいいのにといい、質問をすると小島先生は言った。

「日本のケアマネジャーは介護保険の給付管理をしているのです」

この一言で謎が解けた。日本は保険制度を導入している。サービス給付を点数管理する。だから、毎月の書類業務が大変なのだ。ともすると、ケアを考える時間より、事務業務が優先されがちではないか。

なんで点数なのかと考えると、介護保険は民間活力を導入せざるを得なかった。だから、保険点数でコントロールする必要があるからではないか。現場を信用していないからかもしれない。



小島先生の仕事のしかた

小島先生は、介護保険の縛りや、ケアマネの報酬の低いことに文句を言っている時間があれば、利用者のために働きたいという姿勢なのだろう。

ケアの仕事には、向いている人と不向きな人がいると常々思ってきたが、小島先生は天性のケアの人であるのだろう。それに情熱がある。だから、困難ななかでもケアマネを続けるのではないかな。

私が書いたfacebookに白十字訪問看護ステーションの秋山正子さんがコメントを述べてくださった。

小島さんが元気な姿で安堵しながら、働き過ぎない様にと心配している秋山です。前任の部署では働き過ぎで管理者と合わず、今の職場へかわっているからです。

現場を知り尽くしている秋山さんが投稿なさったのは、本当に小島先生を案じていたからだろう。そして、日本のケアの質を高めるには、ケアマネの存在が必要性と心から思い、応援しているに違いないのである。

小島先生の仕事は、スウェーデンのケアマネであるイボンヌさんの仕事に加えて、高齢者の家を訪問して、その人に会う福祉器具を探し出していた1946年生まれレーナ・モンソンさんの温かさを思い出させた。そして、認知症コーディネーターのレーナ・ルンデルさんの、自分の時間を返上してまで利用者のために働く働きぶりを彷彿とさせてくれた。

サラリーマン的な働き方の人は、社会を変えていくことができない。仕事と自分の人生が一つになったような小島先生のようなケアの人の存在が、必ず日本のケアを変えてくれる。そう私は信じている。